

---

# ゴキげんN A N A M E !

三河 悟

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゴキげんNANAME！

### 【Nコード】

N1377BA

### 【作者名】

三河 悟

### 【あらすじ】

白髪童顔、女の子みたいな男の子、塔城主人とつじょうめいしゅじんはある日不良に絡まれていた所を、おかしな恰好をした少女に助けられた。「アブソリュート」と名乗るその少女は自らを「異次元から来た異次元人」であるとし、主人にこの世界を守るために戦ってくれないかと持ちかける。右翼曲折あつて、主人は渋々ながらその提案を飲んだ。こうして主人は異次元からの侵略者との闘争の日々に身を投じる事となる……。これは大半ギャグ、ちょびつとシリアスな、主人とその仲間達の物語。

## 開幕宣言（プロローグ）（前書き）

自分の趣味を全開にした小説です。それでも読みたいと思った人は読んでみてくだサイ。

## 開幕宣言（プロローグ）

そこには広大な荒野が広がっていた。

全てが瓦礫に埋もれ、あちこちから火の手が上がっている。

この荒野がかつて黄泉市きせんという名の町だった頃の面影はもうない。だがそれはここだけに始まった事ではない。今や全世界がこうなっているのだ。

世界が破滅してから数週間。七月二十五日の今日、全てが終わる。

「そう、全てが終わる」

瓦礫の中にたった一つだけ無事に建っているアパートの一室で、一人の少女が呟いた。

全身が包帯に巻かれた金髪の女の子で、その上からセーラー服を着て、頭には紫色のクモの様なヘルメットを被っている。

彼女の周りには幾多ものコンピュータが立ち並び、膨大な数字の羅列や何かの数値を表している様々な種類のグラフ、そして何かが接近している事を告げるレーダーと警鐘が鳴り響く。

「本部よりレイヴンワン」

少女が無線で誰かへと連絡を取る。

「こちらレイヴンワン、どうした」

無線の向こう側……はるか上空を飛ぶ、幾千もの少年少女達の先頭を切る、リーダーと思われる少女が答えた。

少女は黄色と黒の縞模様のラバースーツとプロテクターで身を固め、頭には八手を模したヘルメットを被り、背中には透明な翅とブースターパックを背負っている。中には「個性的な格好」をした者もいたが、それ以外の者は全て同じ様な格好をしていて、皆一様に翅は使わず、背中のブーストを使って高速飛行していた。

「動きを察知されたみたいだ。全艦隊がこっちに向かって来てるぜえ」

何台ものコンピュータを同時に操作しながら、包帯少女が答える。

リーダーにはいくつもの巨大な丸い艦影がこちらに向かって来ている事が示されていた。

「ウィルスはまだ感染していねえ。空戦部隊は交戦を控え、待機しなあ」

「了解！ レイヴンワン、左旋回！」

包帯少女のさらなる指示に、リーダーの少女が体を左方向に旋回し、後続の少年少女達もそれに従う。

「頼むぜえ、アリユー、バク」

包帯少女がリーダーの一番大きな艦影を見ながら、今はここにいない誰かの名前を呟いた。

ビービービービー！

突然、画面から今までとは違う甲高い警鐘が鳴り響く。

驚いた包帯少女がそれを見ると、画面からアナウンスが流れてくる。

『敵本艦より多数の機影の発艦を確認。移動方法、ホバー移動。進行方向、黄泉市』

「ちっ！」

包帯少女は苦々しく舌打ちして、無線を繋いだ。

「こちら作戦本部、陸戦部隊応答しやがれ！」

「こちら陸戦部隊、どうした」

先ほどのリーダーの少女とは別の少女の声が無線の向こうから聞こえる。

「奴ら陸戦部隊を先遣隊として送り込んできやがった！ 見えるか？」

「ああ……」

無線の向こう側……かつて高層ビルの立ち並ぶ黄泉市の中心部だった更地にいる少女が答えた。

少女はプロテクターの付いた黒いライダースーツに身を包み、頭には赤いアイシールド付の骸骨を模したヘルメットを被り、口元には黒いマスクを着け、首には黒いマフラーを巻いている。

その少女の見つめる先には海が見えた。

ここがかつての黄泉市であれば高層ビルが立ち並んでいるので、海岸部の方は全く見えないのだが、今は瓦礫すらない更地になっているので、内陸であるここからでも海が見えるのだ。

そして海の遥か彼方に、いくつもの巨大な影が見えた。

それらは目を凝らして見ると巨大な円盤軍で、大きさは目測ではあるが、一つの直径は五十キロメートルを超え、円盤軍の中心にいる司令艦と思われる円盤に至っては、二百キロメートルもある。

形は全て平べったい円形で、側面からはソーラーパネルの様な板が何本も生えている。さらに円盤の周囲は薄くて黒い膜の様な物で覆われていて、真上から見るとちょうど真っ黒な太陽のマークに見えた。

そして巨大な司令艦の下部から何か黒い塊が射出された。それは海面に着水すると同時にアリの姿に変形し、海面を滑るようにこちらに向かって疾走してくる。

「来るぞ！ 全員戦闘準備！」

ラバースーツの少女が後ろに向かって力強く叫んだ。

少女の後ろには、同じくライダースーツに身を包んだ黒子達が、槍や剣等の武器を手に持ち大勢並んでいる。ただしヘルメットは白ではなく黒で、マフラーも巻いていないので、少女との違いははっきりとした。黒子達はヘルメットのせいで顔が見えないが、全員がこれから始まる激戦に向けて奮い立っているのはバシバシと伝わってくる。

「始まった」

ライダースーツの少女が前方に視線を移と、そこには上陸して猛進する巨大なアリがいた。そのアリはライダースーツの少女と黒子達から五キロメートル程手前で止まると砂のように崩れ、その一帯を真っ黒に染める。

そしてその真黒な絨毯がボコボコと膨らみ始め、その膨らみは形を変えやがて無数の怪物の姿になった。怪物は古代エジプトのアヌ

ビスの様な半人半獣の姿をしていて、頭には歪曲した巨大な角が生え、手には剣や槍、斧に棍棒等の武器を持っている。それはまさしく悪魔の軍隊と呼ぶに相応しかった。

無数に出現した悪魔の軍隊は鋭い目付きでライダースーツの少女と黒子達を睨みつける。

「行くゾオオオオオオオオオオオオオオオ！」

ライダースーツの少女が剣を空へと掲げて開戦の雄叫びを上げ、

「「「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」」」

「」

後ろの黒子達もそれに応え、一斉に手にする武器を空に掲げる。

『目の前の獲物を狩り尽くせええええええ！』

ライダースーツの少女と黒子達に呼応する様に、軍隊のリーダーと思われる個体が応戦の咆哮を上げ、

「グオオグオオ！　グオオグオオ！　グオオグオオ！　グオオグオオ！　グオオグオオ！」

他の悪魔達も連動して一斉に咆哮した。

「全軍、前進！」

「「「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」」」

「」

ライダースーツの少女が駆けだし、黒子達が後に続く。

「グウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

それを見た悪魔達も進軍を始めた。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

「グウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

両者はまるで黒い洪水の様に押し寄せ、

『ガキガキガキイイン！』

互いに激しくぶつかり合う。

「くそ！」

その様子をモニター画面で見ていた包帯少女が悪態をついた。そして一つの画面を食い入るように見る。

『ウイルス感染率ゼロパーセント』

画面にはそう書いてあった。

「まだか、まだなのか！」

包帯少女は拳を握り締め、焦りの表情を浮かべる。

と、その時。

『ウイルス感染開始。感染率六パーセント……』

画面が切り替わり、アナウンスが流れた。

「よっしゃあ！」

アナウンスを聞いた包帯少女はガッツポーズを取り、空戦部隊へと無線を繋げる。

「こちら本部！ レイヴンワン！ アリユー達がやりやがった！

現在敵メインシステムにウイルス感染中！ 空戦部隊は攻撃態勢に入れ！」

「了解！ 全機、攻撃用意！」

「……了解！」「……」

連絡を受け取ったリーダーの少女の叫びに後続の少年少女達が答え、皆一斉に何処からか槍を取り出した。槍は彼女達の伸長と同じ位の長大な物で、先端には五本の棘の生えた刃が付いている。

「見えた！」

リーダーの少女が叫んだ。

少女達の遥か先の海に巨大な円盤軍が見える。

「それだけじゃないぜ」

少女の後ろから、サメの様な黒い装甲で覆われた男が話しかけてきた。彼は先に出てきた「個性的な格好」の者である。

「下見てみな」

サメ型の男に下を見るように促され、リーダーの少女が下を見ると、町の中心部にあたる更地でライダースーツの少女達の陸戦部隊と敵の悪魔の軍隊が黒い荒波となって激しく戦っていた。

「……ウイルスの感染率は！」

リーダーの少女が本部の包帯少女に向かって叫ぶ。





「レイヴンセブン、ロックオン！」

各機とも次々に円盤軍へと照準を合わせる。

「レイヴンワン、フォックス・ツー！」

「レイヴンゼロ、フォックス・ツー！」

全員がほぼ同時にミサイルを発射した。無数のミサイルが津波のごとく一斉に円盤軍に襲い掛かる。

ドオンドオンドオオオオン！

ミサイルが着弾し、円盤軍の外壁が次々に碎け散った。だがその大きさが故か、墜落するものはいない。

「！」

火の手が上がる中、円盤の外壁に割れ目ができ、そこから無数の悪魔が湧き出てきた。

悪魔は金色のサメの様な装甲で覆われていて、背中には透明な翅が生え、手には巨大なダブルランスを持っている。

「本艦、ステルス解除！」

金色の濁流の様に迫り来る無数の悪魔を見たリーダーの少女が、後ろに向かって叫んだ。

すると、空戦部隊のすぐ後ろから突如として沢山の円盤が出現した。敵の円盤軍と違って色が白く、形も円形ではなく正六角形をしている。

「今だ、撃てえ！」

リーダーの少女の叫びと共に、味方の円盤軍からホーミングレーザーがシャワーの様に放たれた。

ズガアアアアアアアアア！

ホーミングレーザーが当たり、無数の悪魔といくつかの円盤が撃墜され、海へと落ちていく。

「グオアアアアアアアアア！」

だが悪魔はまだまだいる様で、さらに大量の悪魔達が空戦部隊へと突撃してきた。悪魔がランスを空戦部隊に向けると先端から光弾が発射され、無数の光弾が吹雪の様に空戦部隊に襲い掛かる。

「敵の迎撃部隊だ！ 各自ブーストを解除して交戦体勢に入れ！」

リーダーの少女の声が響き、他の空戦部隊はそれに従いブースターの噴出を止め、代わりに今まで使っていなかった翅を使って飛行し、迫り来る光弾の吹雪を柔軟な動きで回避した。

「撃ち落とせええええ！」

リーダーの少女は攻撃を回避しながら一体の悪魔に狙いを付け、刃先の両脇にある四本の棘の内の一本を発射する。それは見事に悪魔に命中し、爆散させた。

そしてリーダーの攻撃を皮切りに、激しい空中戦が開始される。

「……始まったようだな」

その様子をモニター越しに見詰める影があつた。暗がりにいるので、シルエツトしか分からない。

ここは敵円盤軍の司令艦の中。硬質感のある外壁とは違い、壁全体が蠢く生き物の様な内壁だ。

「だが、無駄な足掻きだぜえ、静奈」

暗がりには影が明るい場所に移動してきた。それによって、影の姿がはつきりと見える。

黒いロングヘアーに黒いロングコートを着た黒づくめの少年で、その他の衣類も黒なのだが、何故か頭に巻くバンダナは真っ赤である。目の下に隈が寄つた三白眼に裂けた口という凶相で、表現するなら鬼や悪魔の様な顔だった。

「お前に救えるモノなんて何もない。この世界も、あのゴミ虫共も」

真っ黒な少年は歪な笑顔を作りながら、一步、また一步とゆっくりと前に進む。そして急に立ち止まると、自分の目の前に向かって指差した。

「お前自身もな」

「……」

真っ黒な少年の指差す先には人が一人佇んでいた。

雪のように真っ白な髪と肌、血のように真っ赤な瞳を持つ少女で、帽子の付いたセーターと水色のミニスカートを穿<sup>は</sup>いている。

真っ白な少女はしばらく黙っていたが、やがて吹っ切れた様な笑顔になり、

「……私は世界を救おうとか、そんな大それた事は考えてないよ。私が守りたいのは……救いたいのは、私が住むこの町とあの子達、そして……」

自分の正面に立つ真っ黒な少年を指差し、

「主人、あんたをね！」

「ぷっ！」

アハハハハハハハと、少年は大笑いした。

「お前、馬鹿か？ この期に及んでまだそんな事言ってるのかよ」

「私は馬鹿じゃないし、いつだって本気よ。そのために外でも、中でも皆頑張っているわ」

真っ白な少女の言う通り、この司令艦の内部のあちこちで様々な恰好をした少女が戦いを繰り広げている。

黒いワンピースの女の子、白いオーバーオールの子、ピエロの恰好をした女の子、掌サイズのメイド服を着た女の子、ひよこの着ぐるみを着た女の子、チャイナ風のボンテージ服の女の子、囚人の様なタイツ姿の女の子、マジシャンの恰好の青年、カーボーイ風の女の子、プラグスーツのコスプレ服を着た女の子、全裸に蛇を巻いたエロい女性、フードにウサ耳付けた女の子、フラメンコ風の女の子、ゴスロリファッションの女の子、ヒーロー戦隊の様な変な恰好をした男の子、赤い仮面を付けた男の子、ガチャピンみたいな恰好の女の子……それぞれ恰好も性格も全く違うが、目的は皆同じだった。

「そう、皆『日常』を守るために戦っている」

真っ白な少女が今も戦う少女少女の気持ちを変弁する。

「ハッ！ 無駄だよ、無駄」

そんな真っ白な少女の言葉を真っ黒な少年は真っ向から否定した。  
「俺がぜえんぶ壊してやる！ 世界も、あのゴミ虫共も、そしてお前もなあ！」

そして歓喜の表情で叫ぶ。

「全ての人類を討ち滅ぼすのだああああああああ！」

「させない！」

真っ白な少女が力強く真っ黒な少年の言葉を否定し返した。

「必ず皆を、そしてあんたを救ってみせる！」

「下らねええんだよおおおおおおおおお！」

真っ黒な少年が大気を震わせる程の叫び声を上げる。

すると、真っ黒な少年の胸元が輝きだした。

そこには黒い勾玉の様な石があり、そこから黒い靄もやの様な物が噴き出し、真っ黒な少年を包み込む。そして靄が晴れるとそこに真っ黒な少年の姿はなく、代わりに別の「モノ」が立っていた。

それは漆黒の西洋風の甲冑に身を包み、黒いマフラーとマントを羽織っていて、手には身の丈を超す程の巨大な大鎌を持っている。

その姿は悪魔の騎士と呼ぶに相応しかった。

それに応える様に、真っ白な少女の胸元が輝きだす。

そこには真っ黒な少年とは違った形の白い勾玉があり、そこから光の粒子が溢れ出て、真っ白な少女を包み込んだ。そしてその中から新たな戦士が誕生する。

その戦士は銀白のヴァルキリースーツに身を包み、背中から真っ白な翅を生やした、純白の天使の姿をしていた。その手には西洋風にアレンジした薙刀が握られていて、純白天使はそれを悪魔騎士へと真っ直ぐに向ける。

純白天使と悪魔騎士はしばらく睨み合った後、

「はあああああああああああ！」

「ヒャッハアアアアアアアア！」

二人同時に駆けだし、激突した。

火花を散らしながらぶつかり合う中、二人は考えていた。

どうしてこうなってしまったのかを。

……それはこれから始まる、とある少年と少女の物語によって紡がれる。

## 開幕宣言（プロローグ）（後書き）

プロローグなのにいきなり世界崩壊から始まるというところでもない内容でスガ、この場面は次回から始まる本編の中でいずれ出てきます。興味のある方は読んでください。

## 一期一会（前書き）

文字通り物語の始まりとなる話です。どうぞお楽しみください。

## 一期一会

とある地域にある町、きせん黄泉市。

上から見ると丁度三角形に見えるので、「陸の魔のトライアングル」などとも呼ばれる。

町は巨大なビルがジャングルのように建ち並ぶ中心部と、閑散とした郊外とに分かれている。周囲は山で囲まれ、東側は海に面して農家や漁業を営む人達もいる、自然と人が共存した美しい町だ。

その郊外の一角にある小さな二階建てのアパート『月光荘』。

そこがこの僕、たけぎのしゅじん塔城主人の家である。

だが別に部屋を借りて住んでいる訳ではない。僕はここ『月光荘』の大家、みさき塔城岬の一人息子というだけの事だ。

さて、僕は今何をしているのかと言うと、ラッピングされた週刊誌を開けているところだ。

今これを読んでいる老若男女、紳士淑女の皆様は何を意味分らない事しているんだこいつ、と言いたいところだろうが、それが僕の朝の仕事なのだから仕方ない。

『月光荘』は二階が借家、一階が僕と母さんの住む自宅となつて  
いるのだが、一階には他にも母さんが経営する小さな本屋『つきあかり月明書店』があり、僕は毎朝その手伝いをしているのだ。

『月明書店』の内装は一般的な書店と大体同じで、入り口を入つてすぐ目の前に週刊雑誌コーナー、右側にレジカウンター、左側に幾つかの文房具コーナーがあり、その奥にはコミックや小説などの本棚が並んでいる。明るく朗らかとした雰囲気のお店だ。

「母さん、終わったよー！」

僕は週刊誌を出し終え雑誌コーナーに積み上げると、文房具コーナーに向けて叫んだ。すると文房具コーナーから僕の母、塔城岬が顔を出す。

蒼い瞳に綺麗な金髪を持つ美女で、それをポニーテールにしてま



とめている。服装はチェックのワイシャツに紺のジーンズ、『月明書店』と書かれたエプロンという、いかにも個人経営の店と言った格好だ。ただ、胸は常識外れに大きいので結構きつそうであるが。「あんがとー、あとごみ捨てもしといて。ゴミは家の玄関に置いてあるから」

母さんは手をひらひら振りつつそれだけ言うと、また文房具コーナーに戻って行った。恐らくまだ品出しの途中なのだろう。

「わかった。じゃあ、行ってきます」

文房具コーナーから行ってらっしゃーいという母さんの声を確認すると、僕はレジの方に向かった。レジには一枚の扉があり、開けると何足かの靴と靴箱、二つのゴミ袋が見えた。実は自宅と『月明書店』は玄関で繋がっており、この扉はその出入り口なのだ。

僕は一旦自分の部屋に戻って制服に着替え、ゴミ袋を家の前に止めてある通学用のママチャリのハンドルにぶら下げ、自転車を押し始めた。

さて、僕がこれからどこに行くのかと言うと、町の中心部にある学校に行くのである。

言っていなかったが、僕は『私立月陰<sup>つきかげ</sup>高校』に通う現役高校生なのだ。

「すいません！」

僕がしばらく歩いてみると、通りの角から男の子が一人出てきた。

男の子は僕に一枚の手紙を差し出すと、勢いよく頭を下げ、

「前から貴方の事が好きでした！付き合ってください！」

唐突に愛の告白をしてきた。

「ぜひ、それを読んでください！」

男の子があまりに強く勧めてくるので、僕は渋々その手紙を読んだ。内容はプライバシー保護の観点からはつきりとは明かせないが、要は「貴方の事がいつも気になっていて、遂に今日告白する事にしました」的な事が書いてある。制服がウチの学校の物とは違うので近くの学校の生徒だと思われるが、一体いつ僕の事を見ていたのだ

ろうか。

それはそれとして、彼の熱烈な告白に対する僕の答えは決まっている。

「すいません、僕「男」なんですけど」

「！」

男の子は驚愕の表情を浮かべ、

「マドモワゼエエル！」

変な叫び声を上げながら何処かに走り去っていった。

そう、腰まで伸びた白銀の髪に童顔のせいでよく間違えられるが、僕は列記とした男の子である。断じて“僕っ娘”ではない。

しかし、初対面の人は必ずと言っていい程僕を女の子に間違える。さっきの哀れな男の子のように熱烈な告白をしては散っていく人もかなりいた。きちんと男子用の制服を着ているし、私服も男の子向けの物にしているというのに、これは一体どういう事なのだろうか。まあ、今更と言えば今更なのだが。

それよりも今はゴミ捨てて早く学校に行かなければ。

『月陰高校』は町の中心部にあり、結構距離がある。さっきの騒動のせいでかなり時間を喰ってしまったので、今からだギリギリだ。急がないと間に合わない。僕は少し早歩きでゴミ捨て場へと向かう。

「！」

だがそうは問屋が卸さなかった。

さっきの騒動から数分、やっとこさゴミ捨て場の前に着くと、そこに三人の不良がいたのだ。

スキンヘッドの巨漢と、金髪でオールバックのニヒルと、背が一番低い熱血系馬鹿の三人組で、暇そうに煙草をふかしながらうろこ座りしている。

「あん？」

熱血系馬鹿が僕に気付くと、ズカズカと近づいてきた。

「おうおう、嬢ちゃんよ、朝からこんな所で何してんだあ？」

自分より背の低い奴に嬢ちゃん呼ばわりされたくないし、ゴミ袋  
ハンドルに下げてんだからそれくらい分かるだろう、と言いたい所  
だったが、不良三人を前にそんなふてぶてしい事言えるはずもない  
ので、僕は黙ったままである。

そんな態度が気に入らないのか、熱血系馬鹿は更に絡んできた。

「おいおい、黙ってちや分かんねえだろ？　ここらは俺らの溜り場  
なんだよ。そこに勝手に入って来られちまうと困るんだよなあ」

いつからこのゴミ捨て場はお前らの溜り場になったんだ、それに  
ゴミ捨て場に屯<sup>たむろ</sup>っているってお前らハエか、と突っ込みたくなっ  
たが、やっぱり言えるはずもないので僕は黙った。

「やめとけよ、竜馬<sup>りゅうま</sup>。その娘はここにゴミを捨てに来ただけだ。咎  
めるほどの事じゃねえよ」

金髪二ヒルが僕にしつこく絡む熱血系馬鹿……竜馬という男を制  
した。どうやら竜馬よりは頭が回る（当たり前）の事しか言っていな  
いが）ようだ。

「でもよお、隼人<sup>はやと</sup>」

竜馬は金髪二ヒル……隼人という男に食い下がった。一体何故そ  
こまでこのゴミ捨て場に拘るんだこの馬鹿は。ゴミ捨て場だぞ、ゴ  
ミ捨て場。せめて公園のベンチとかにしておけよ。

隼人はあっぱっぱはと笑い、仕方がないといったポーズを取る。  
「別にゴミならいくらでも捨ててかまわねえし、この道を通っても  
何の問題もねえよ。通行料と、ゴミ捨て料さえ払ってくれたらな。  
そうだろ？　武蔵<sup>むさし</sup>」

「大雪山おろし」

隼人の言葉に、スキンヘッドの巨漢……武蔵という男が自信満々  
に答えた。いや、意味分かん。

とにかくこの三人、僕にたかりをしたいらしい。しかし通行料な  
らまだしもゴミ捨て料というのはいかなものだろう。まあ、金を  
巻き上げる理由なんて、適当なものでいいのだろうが。

だがこのまま話が進めば僕は確実に通行料とゴミ捨て料とやらを

取られてしまう。

一目散に逃げ去りたい所だが、この大荷物では素早く動けないし、ゴミ袋ならまだしも鞆や自転車は置いていく訳にもいかない。ここから徒歩で学校に行くのは正直きつい。しかし何もしなければ金を巻き上げられる……。

結局堂々巡りしているだけで、僕は突っ立ったままだった。

そんな僕に、不良三人組が若干下心のある手つきで迫って来る。

そう言えば、竜馬が「嬢ちゃん」って言っていたな。

つまり僕はまた女の子に間違えられているらしい。隼人が不良の割りに嫌に穏便な態度だと思ったら、そういう事か。これで僕が男だと分かったら、一体どうなってしまうのдарう。とんでもない修羅場か思い浮かばない……。

と、その時、

「待つアル！」

どこからか女の子の声が聞こえ、

「とりゃあ！」

ゴミ捨て場のゴミ袋の山の中から、女の子が飛び出してきた。

「とう！」

女の子はその勢いのまま空高く飛び上がると、くるくる宙返りしながら、僕と不良三人組の間に割って入るように着地する。それによって、僕はその姿をまじまじと見る事ができた。

年の頃は十二、三才、ピンク色の髪に赤い瞳を持つ褐色肌の女の子で、身体のいたる所に鮫のエラのような黒い模様があり、スカートの裾がギザギザしてお尻に二本の飾りの付いた黒いノースリーブのワンピースと黒いスニーカーを履き、手首と足首には赤いリング、背中には黒と透明の虫の翅のような飾り、頭には耳飾りの付いた大きな黒い帽子を被っている。

少し、いや、かなり変わった女の子だ。この娘一体何なのだろうか。

「ふう……」

着地してから数秒後、女の子はゆっくりと立ち上がると不良三人組の方を指差し、

「やい、不良共！　こんな弱い女の子からお金を巻き上げようとするとは、外道にも程があるネ！　弱い者イジメはこのアブソリュートが許さないアル！」

堂々かつ熱血的な自己紹介をした。

そうか、この娘アブソリュートって言うのか。

でもこの局面でそんな挑発的な自己紹介をしては駄目だろう。

「ああ！？　あんだと、このクソガキ！」

「子供と言えど、その態度は許せんなあ！」

「ゲッターミサイル」

案の定挑発に乗った不良三人組が、怒り心頭といった感じでアブソリュートに殴り掛かった。

しかしながら、小学校高学年位の子供の挑発に乗ってしまうこいつらの方がよっぽど子供である。どんだけ短気なんだこいつら。

と、そんな事している場合じゃなかった。

どんなに大見得切った所で、アブソリュートは子供、高校生三人掛かりが相手では結果は見えている。早く止めないと大変な事になるだろう。

「ちよつと、君らそんな子供に……」

僕は慌てて止めに入ったが（下らない一人突っ込みしていたせいで）一歩遅く、既に不良三人組の拳はアブソリュートに向けて放たれていた。

その拳は幼げなアブソリュートの顔目掛けて真っ直ぐに向かい、

「！」「！」「！」

何にも当たらずに空を切る。

不良三人組の拳が当たろうかというその瞬間、目の前にいたアブソリュートの姿が忽然と消えたのだ。

「一体何処へ……」

僕も、そして不良三人組も揃って辺りを見回す。

すると、上からあっはっはっはという不敵な高笑いが聞こえてきたので空を見上げると、高さ三十メートル程の上空でアブソリュートが「飛んで」いた。

「跳んでいる」ではなく「飛んでいる」である。

いや、前者でも充分おかしいが、アブソリュートはそれを上回る後者の方を体現していた。

そう、彼女は飛んでいるのだ。背中にある翅を使つて。

あれ、飾りじゃなかったのか。

「この私にまで襲い掛かって来るとは、女の敵め。お前らにはちょっときつーいお灸を据えてやるアル！」

そう叫ぶや否やアブソリュートは不良三人組目掛けて一気に急降下した。

「う、うおおおお！」

余りの出来事に唖然としていた不良三人組だったが、アブソリュートの急接近によりやく我に返り、まずは竜馬が反撃の拳を繰り出す。

だがその攻撃はアブソリュートが飛ぶ方向を変えた事でまたも空を切り、彼女はそのまま塀に着地すると……シャカシャカと塀を高速で這いずり回った。

「……キモい……」

僕と不良三人組は声を揃えて叫ぶ。

女の子にそんな事を言うのは失礼かもしれないが、空をパタパタ飛ばれたり、壁を這いずり回られたりされたら誰しもがそう言うだろう。他にどう言えと言うのだ。

「はっ！」

アブソリュートは不良三人組を翻弄するように這い回った後、突如として壁から飛び跳ね三人の背後に着地する。

「しまった！」

三人の内、竜馬だけが反応することができたが、もう遅い。すっかり隙だらけとなった三人の背後に立つアブソリュートは、

その背中に向けて勢い良く飛び上がり、続けて体を捻りながら三人の後頭部に空中回し蹴りを喰らわせた。

「がっ……」「ぐっ……」「ミサイルストーム……」

三人はそれぞれ思い思いの声を上げながら、その場に崩れ落ちていく。

「ふっはっはっは！ 正義は勝つ！」

三人が倒れ伏す中で、アブソリュートが勝利のガッツポーズを取った。僕はそんな彼女を呆然としたまま見つめる。

彼女は本当に一体何者なのだろう。

目視できない程の速さで動き、翅を使って空を飛び、掴まる所など何処にもない垂直な壁を手足を使って這いずり回り、不意打ちとはいえ高校生三人を一撃で昏倒させるその身体能力は、人間のものではない。

人間のものではない？

では一体「何」のものだと言うのだ。

「おい、お前」

黙ったまま突っ立っている僕に、アブソリュートが話しかけてくる。

「……」

僕がそれでも黙っていると、彼女はスタスタと近づいてきて僕の体中を撫でる様に触りまくった。まずは精一杯背伸びして顔を、次に腕、胸元、お腹、そして……。

「！ な、何を？」

そこまで来てハッと我に返った僕は勢いよく後ろへと下がり、彼女の魔手から逃れた。心臓が激しく動悸し、顔が一気に紅潮する。

何だこれ？ 何なんだこれ！？

「怪我はないみたいアルネ」

良かったアル、とアブソリュートは満面の笑顔でそう言った。どうやら彼女は僕が怪我をしていないかどうか見てくれたらしい。それはありがたい話だが、体中を触るのは止めてもらいたい。これでも僕、男の子なので。

「……き、君は……」

未だに動悸し続ける心臓を必死に宿め<sup>なだ</sup>ながら、僕はアブソリュートに尋ねる。

「君は一体……何なんだ？」

助けてくれた恩人にそんな事を聞くのは失礼に値するかもしれないが、僕は聞かずにはいられなかった。

彼女は人間ではないかもしれない。

ならば彼女は一体「何」なのか。

僕はそれが気になって仕方なかったのだ。

「あつはつはつは！」

するとアブソリュートは高らかに笑い、腰に手を当てて胸を張った。その姿は友達に自慢話をする小学生の様にも見える。

そして彼女はよくぞ聞いてくれたと言わんばかりの自信たっぷりの笑顔で、

「私の名前はアブソリュート。異次元世界『デルタ界』から来た「異次元人」アル！」

堂々とそう言い切った。



## 一期一会（後書き）

何処かで聞いた事ある生の人物が出てきますが、気にした負けデス。次回はちゃんとした『敵』が現れます。それでは皆様、次回お会いしましょう。

## 一新紀元（前書き）

サブタイトルは何かが終わったり何かが始まるという意味で、このお話はまさしくそんな感じデス。ぜひ楽しんでくだサイ。

## 一新紀元

「つまり君は異次元世界『デルタ界』から来た異次元人で、悪い考えを持った異次元人がこの世界を侵略しようとしているから、君はその悪い奴らからこの世界を守るためにここにいろって訳だ」

「うん！ そうアルそうアル！ 物分かりがいいアルナ、お前！」

僕の質問に自称異次元人、アブソリユートが答えた。

いや、意味分からん。

いきなりそんな超常設定の説明されても、こっちは困るだけだ。

確かに空を飛んだり、壁を這いずり回ったり、目視できない程の俊足を発揮したりと、彼女が垣間見せたその身体能力は人外レベルであるが、「異次元から侵略の魔の手が伸びている」などというB級映画みたいな設定を素直に受け入れられる程、僕は純朴で純粹な夢と希望に溢れる青少年ではない。どちらかと言うとかなりネガティブな方だ。

頼む相手を間違えてるんじゃないか？

だからと言って子供相手に無下な態度であしらうのも芸がない。

僕ももう高校生だ、ここは少しばかり大人の対応と言っのを試してみよう。

「どうして君はこの世界を守ろうと思ったんだい？ アブソリユートちゃん」

「うん？ 私の事は「アリユー」でいいアルヨ」

いきなりニックネームが解禁された。

何たるフレンドリー。しんのすけかお前は。

「それで、どうしてそう思ったんだい？ アリユーちゃん」

さあ、僕の生まれて初めての大人っぽい対応へのアリユーの返事  
は、  
「……」

沈黙だった。

いやいや、黙られては何も分からないし、僕の猜疑心さいぎが深まるばかりなんだが。

しかしここで、

「黙っていや分からないだろう。言いたい事ははっきり言いなさい」

なんて問詰める様な言い方してしたら、ますます黙り込んでしまっただろう。

さて、どうしたものか……。

「……実は」

すると、黙っていたアリユーが自分から口を開いた。

やれやれ、とりあえずこれで間が持ったな……。

と、思ったその時、

「あのー！」

誰かに呼びかけられた。

前を見ると、手にゴミ袋を下げた妙齡の女性が、僕に向かって手を振っている。女性はそのまま僕の方に向かって小走りで近づいてきた。僕は足を止めてそれを待つ。

「すいません、ゴミ収集車ってまだ来てませんよね？」

女性は少し息を切らせながら質問してきた。

どうやらこの女性、ゴミ捨てに出てくる時間が少し遅れてしまったらしい。そこでゴミ捨て場の方から来た僕に確認を取ったという訳だ。

「ええ、僕もさっき捨ててきたばかりですし、多分まだ来ていないと思いますよ」

僕は懇切丁寧に答えた。

ゴミ捨て場にはまだ不良という名のゴミが打ち捨てられているような気がするが、『ただの屍のようだ』状態だから気にしなくてもいいか。例えば目を覚まして戦う気力などないだろう。

それは聞いた女性はお礼を言っ僕の横を通り過ぎ、僕も前に向き直り歩き始めようとした。

したのだが。

「危ないアルウウウウ！」

突如アリユーにタツクルで吹き飛ばされた。

僕とアリユーは自転車を置き去りにして少しの間地面をゴロゴロ転がり、塀にぶつかった所でどうにか止まる。塀はコンクリートなのでかなり痛い。

「危ない所だったアルネ！」

僕の上にのしかかったままのアリユーは堂々とそんな事を言うてのけた。

怒っていい？　ここは怒っていいよね？

「危険なのは君の方だろう！　今の何処に危険な要素があつたんだよ！」

「なら後ろ見るアル、後ろ！」

怒り心頭の僕に対しアリユーは謝りもせず、自分の後ろを指差すばかりである。

本気でブン殴ろうかな、と思いつつアリユーの言う通り彼女の後ろ側に目をやると、

「な……？」

そこには“僕の自転車を地面に「串刺し」にした”、妙齡の女性が立っていた。

「串刺し」と言うのは比喻でも何でもなく、女性の片腕が槍の様に変化し、文字通り腕で自転車を地面に串刺しにしていたのだ。

「何だ、何なんだアレ……」

頭の中が酷く混乱している。

僕は女性と他愛もない会話して、別れの挨拶を交わした。

だが次の瞬間にアリユーに吹っ飛ばされ、そして僕の立っていた所に自転車を串刺しにした女性が立っている。

全く持つてして訳が分からない。

ただ一つだけ分かっている事は、こうしてアリユーに吹っ飛ばされていなければ、あの自転車の代わりに僕が標本の様に串刺しにな

つていたという事だ。

昆虫標本ならぬ人体標本。

別れの挨拶が遺言になる所だった。

『あんたあ！ 何で私の邪魔するのよ！』

女性が正体不明の言語で怒鳴りつける。

何を言っているのかはさっぱり分らないが、雰囲気から言っ  
かなりの勢いで怒っているようだ。

もう、訳が分からないよ。

『知るかあ！ 私にも分らないアル！』

すると、アリューも女性に対して正体不明の言語で怒鳴り返した。

「え？ 君、あの人が何を言っているのか分かるの？」

「うん」

どうやら彼女はあの女性と意思疎通ができるらしい。

なら聞いておくべき事があるだろう。

「あの人は……アレは一体「何」なんだ？」

「アレは「神」<sup>アバター</sup>。さっき言った悪い異次元人アル」

あの話本当だったのか。

今更ながら、やっと信じる事ができそうである。

『あんたまさか……』

女性は苦々しい顔でアリューを睨みつける。そして、

『ならあんたは「敵」だ！ その人間共々ブツ殺してやるわ！』

女性の体に変化が起き始めた。

背中からさつき僕の自転車を串刺しにした槍の様な細長い脚が二  
本生え、残っていた腕と脚も同じく槍の形に変わり、体が長く棒状  
に伸び、顔がスライムの如くグニャグニャと様変わりしていく。

そして気が付くと、さつきまで人間の女性だったそれは、異形の  
化け物に変わっていた。

迷彩模様の装甲に覆われた細長い身体の化け物で、そこからカメ  
ラの三脚のような六本の異常に長い脚を生やし、亀の甲羅のような  
物で覆われた頭部には鋭い牙の生える裂けた口があり、その口内に

は赤く光り輝く光球がある。

- - - - - 『#002: Avatar・The・Helium』  
- - - - -

「ヒュリリリリリリリリリリリリリリリリ！」

化け物が大気を凍り付かせる様な冷たく恐ろしい叫び声を上げた。

「な、何だよ、あの化け物」

何とか立ち上がった僕だったが、その叫び声で再び腰を抜かす。

「あれが「神」の本来の姿アル」

一方のアリユーは目の前の異常事態がさも当然の事象とでも言わんばかりの平然とした態度で、化け物……いや、「神」を指差した。「神」は普段はさつきみたいに擬態して社会に紛れているネ。そして獲物を襲う時や外敵に出くわした時に本性を現すアル」

異次元“人”と言うからてつきり人型をしているのかと思っていたが、どうやらそれはとんだ思い違い、勘違いだったらしい。

「それにしても「擬態」って、まるでカメレオンか何かみたいだな

……」

「いや、あれはカメレオンじゃなくて「昆虫」アル」

僕のふとした疑問に、アリユーが律儀に答えてくれた。

「ええ！？ あれ、昆虫<sup>むし</sup>なの？」

「そうアル。私達『デルタ界』の住人は“自分の肉体”と言うものを持たない、精神だけの生き物アル。だから侵略する時はその世界の生き物に取憑いて、その身体を自分のものにするアルヨ。この世界だとその「器」に選ばれたのが昆虫だったって事アルネ」

つまり、アリユーやあの「神」の身体は、元々は昆虫を乗っ取ったものって事か。

「因みにあの「神」が憑依してるのは「ナナフシ」と言う昆虫アル」「ナナフシ！？」

確かに言われてみると、棒のように長い体とコンパスの様な細長

い脚を持つその姿は、頑張ればナナフシに見えなくもない。でも、原型失い過ぎだろう、アレ。

「ヒュリリリリリリリリリリリリリリリリリ！」

ボツ！

突如「神」が口から赤ん坊程の大きさの木の種の様な物を吐き出してきた。

「おっと！」

するとそれに合わせてアリユーも動き出す。

まずスカートの二本の飾りが爆ぜ飛びアリユーがそれを掴むと、一瞬にして形を変えて黒く巨大な二本の槍になり、アリユーはその二本の柄の部分を接合しデュアルランサーに変えた。

それと同時にアリユーにも変化が起き始める。

帽子の耳飾りが蝙蝠の羽に変わり、目付きは鋭くなり瞳も金色に変色し、手の爪は獣のように鋭く伸び、靴にも三本の爪が生えた。

その姿はまるで漫画に出てくる小悪魔の様である。

「せい！」

アリユーは迫り来る「神」の口から放たれた木の種の様な物を薙ぎ払い、それを「神」の顔面に跳ね返した。その物体は「神」の顔に当たると爆発を起こす。どうやらあの木の種の様な物は炸裂弾だったようで、「神」も堪<sup>たま</sup>らずよろけた。

「ビュリリリリリリリリリリリリリリリ！」

怒りに満ちた「神」の咆哮が響く。

「危ないから下がっているアル！」

「う、うん」

僕はアリユーに言われるがまま物陰に隠れた。

高校生男子とは思えない情けなさだが、こんな人外バトルに介入できるような力は持ち合わせていないし、逆にこのままここにいてはお荷物になるだけだろう。

「ヒュリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリ！」

ボツボツボツボツボツボツボツボツボツボツ！



「神」が再び口から木の種のような炸裂弾を吐き飛ばした。

しかも今回は一発ではなく、十発もの出血大サービスである。

「当たるか！」

しかし、それらは文字通り目にも止まらぬ速さのアリユーの神足によつて全てかわされてしまった。

驚いた「神」が、今度はその槍のような細長い腕をアリユーに突き出す。

「はっ！」

だがアリユーはそれを体を少し浮かせただけでかわし、そのまま腕に着地した。さらに先程とは桁違いのスピードで腕の上を走り抜ける。

同時に走っているアリユーの体に黒い稲妻が走り、やがてそれはアリユーをすっぽり包み込み、一本の黒い光の筋に変えた。

「ブラック・レイ・ランサー！」

黒い光の筋は「神」の顔を射抜き、口の中にあつた光の珠を打ち砕く。

そして黒い光の筋はそのまま地面に着地すると、光が消えていき着地の体勢をとったアリユーが現れた。

「ヒュリリリリリリリリリリリリリリリリリ！」

「神」が断末魔の叫びを上げる。

すると体が赤い結晶体へと変わっていき、やがて爆散した。

赤い霰が降る中アリユーは少しの間黙って立っていたが、やがて槍を元の飾りに戻しスカートに付けなおす。

「もう大丈夫アルヨー！」

アリユーが物陰に隠れる僕に手を振ってきた。

さっきまでの小悪魔の格好から元の姿に戻っており、安心した僕はゆっくりと腰を上げる。

そしてアリユーのもとへ歩み寄ると、僕は右出を差し出し、

「ありがとう。僕は主人<sup>あにやうじん</sup>。塔城主人<sup>とうじょうしゅじん</sup>。よろしくね」

名前を言うのを忘れていたので、お礼のついでに自己紹介した。

「どういたしましてアル！ 改めてよろしくアル！」

アリユーが破顔の笑顔で僕の手を握り返す。

「そう言えば気になっていたんだけどさ」

と、自己紹介が終わった所で僕は話題を切り替えた。

「君達『デルタ界』の住人は昆虫に憑依してこの世界に来ているって言ってたけど、君は一体何の昆虫に憑依してるんだい？」

そう、僕はそれがずーっと気になっていたのだ。

アリユーもあの「神」と同じ異次元人だと言うなら、彼女も何かしらの昆虫に憑依しているはずである。助けてもらっておいてこんな事を聞くのは野暮かもしれないが、彼女の体は昆虫が変化した体なので、何と云うかその、せめて自分が今何に触っているのかくらい知りたいじゃないか。

カブトムシとかチョウチョとかならいいけど、毛虫とかだったら絶叫モノだ。嫌いなんだよ、毛虫。

「むふふふー、知りたいアルか？」

アリユーはまるで好きな人に想いを伝えるかの様に頬を染めた。

いや、こっちとしては結構切実な問題なので真面目に答えてほしいのだが……。

「うん、知りたいな」

「ニシシシ、なら教えてあげるアル！ 私が憑依している昆虫は……」

そして彼女はそのいい笑顔のまま、衝撃的な真実を口にする。

「『ゴキブリ』アル！」

## 一新紀元（後書き）

次回まだ残っている謎とかが解けます。例えば「何でアリューがこの世界を守ろうとしてくれるか」トカ。その辺を知りたい方は次回を楽しみにしていってください。

## 安常処順（前書き）

続きデス。この辺から作者の趣味が暴走し始めマス。それでも読みたいと思ってくれる優しいお方、どうぞお楽しみくだサイ。

## 安常処順

僕は全身全霊、死力を尽くして走っていた。

そのスピードはいつもの僕からは想像もつかない程の速さである。人間、危機に陥ると身体のリミッターが外れ凄まじい身体能力を発揮すると言うが、まさに今の僕がそうなのだろう。

だってあり得ないもん。

あの子が、アリユーの正体が……「アレ」だなんて！

「何で逃げるアル？」

「ぎゃああああああああああああああああ！」

いつの間にかアリユーが僕の脇に並んで走っていた。

まあ、彼女の身体能力を考えれば不思議はない。何せ素<sup>もと</sup>になって  
いるモノが「アレ」なのだから。

そう、さつき僕は聞いてしまったのだ。

アリユーが今憑依しているモノが「何」なのかを。

「私が憑依しているのが「ゴキブリ」だっていう事に何か問題でもあるネ？」

「どうわああああああ！ 言うなあ！ 言うんじゃないい！」

僕は必死になって彼女の言葉を否定した。

だって僕はさつき握手したんだぞ、「アレ」と！ その前には押し倒されもしたしな、「アレ」に！

そんなの認められるかあ！

「むう、もしかして私の話を信用していないアルカ？」

必死に逃げる僕を見てアリユーが素敵な勘違いをしていた。そういう問題じゃないんだよ！

「ならこれで信じてもらえるアルネ！」

彼女は何かを思い付いたように帽子を脱いだ。

「そんな事しても証拠になる訳……」  
なる訳ない。



かなり怖かったが、同時にワクワクしていたというのも事実である。

「……」

本当に逃げて良かったのだろうか。

「日常」から脱するチャンスだったというのに。

「……バカバカしい」

何を言っているんだ僕は。

どんなに面白い展開だからって僕が死んだら元も子もないじゃないか。

そういうモノは傍観者だから面白いのであって、当事者は口が裂けても面白いだなんて言えないだろう。

平和が一番。

「おや、どうした若いの」

誰かに声をかけられたので、その声のした方に視線を向けると、何本か釣竿を背負ったいい年のおっさんがいた。

服はボロボロで薄汚れていて、おっさん本人も垢で塗まみれている。

いわゆるホームレスと言う奴だ。背負った釣竿だけは妙に新しいけど。

「こんな時間にこんな場所にいるとは、さては兄ちゃん、学校サボったな」

おっさんは僕の横に座ると、親しげに話しかけてきた。

これでこのおっさんが人間に擬態している「神」アバターだったら今頃僕はあの世逝きだっただろうが、おっさんはただニコニコ笑っているだけである。どうやら杞憂だったようだ。

「……ええ、ちょっと一騒動ありましたね」

僕はそれとなく警戒しつつ相槌を打つ。

「まあ、詳しくは聞かんよ。わしも若い頃はそれなりにやんちゃだったしなあ」

おっさんが感慨深い表情で空を見上げた。「やんちゃだった」頃の事を思い出しているのだろう。

現状で若者である僕にはその気持ちはよく分らないけれど。

「さて、話してばかりもなんだ。せつかくだから釣りでもしながら話さんか？」

おっさんは脇に置いてある釣竿を誘うように見せつけてきた。

「……ええ、いいですよ」

まあ、このおっさんは「神」ではないようだし（確実な証拠はないけど）、今更学校行く気もしないしな。

「ただし僕は素人なので、三度の飯より釣りが大好きな田舎坊主みたいにはいきませんよ」

「いや、そこまで期待してないから。さあ、行こうか」

僕とおっさんは川原の方に降りて行き、釣竿を垂らした。

僕の垂らす釣竿はおっさんから借りた物で、普段は知り合いのホームレスの人に貸して釣りをしているらしい。

「ふう、釣りはええなあ。ノルマもなく、自由にのんびりと楽しむ事ができる」

釣りを始めると、おっさんがしみじみと空を見上げながら呟いた。  
「そうですね」

確かにこうして時間を忘れてのんびりとできるのなら釣りも悪くない。その代り明日母さんとかにめいいっぱい怒られるだろうけど。

おっさんは気分を良くしたのかうんうんと頷き、

「ところで兄ちゃん一人なんだい？ 友達とかは？」

そんな質問をしてきた。

「……」

瞬間、僕の顔が引き攣る。

このおっさんは何て残酷な質問をしてくるのだろう。詳しくは聞かないって言ったじゃないか。

「……ははは、いますよ、今ここにはいないけど。愛と勇気ってお友達がね。あの賞味期限切れのカビパン……いや、アンパン男と同じですよ」

「いやいや、彼は現役だから！ 毎回あの頭新品に変わってるから



！　って言うか、あれ？　今の聞いちゃいけなかったの？　若者が学校サボったら、大体は誰かとつるんでだべっているもんだとばかり思ってたから……謝ります、ごめんなさい、許してください！」

「いえ、いいんですよ。僕みたいなび太系の奴は、自称友達のデスボイス・マイスターTに搾取され、心友と言う名の狸型ロボットの脛を齧るような二トト人生を送っていればいいんですよ」

「君、何でさつきから国民的アニメに対して否定的なの！？」

「僕にとつての国民的アニメは「クレヨンしんちゃん」だけだあ！」

「何でドラえもんとかを差し置いてクレヨンしんちゃん！？」

「ああ！　臼井先生、帰って来てくれえ！」

「その愛を他の二人にも向けてあげなよ！」

「おっと」

おっさんとの楽しい会話はかなをしている内に、僕の竿が引いていた。

「引いてるぞ！　行けえ、少年！」

おっさんが僕の釣竿に手を添える。ちょっと臭うが、気にしたら負けだ。

「言われずとも、釣り上げて見せますよ！」

竿が大きくしなっている。かなりの大物らしい。

僕は渾身の力を込めて竿を引いた。

「セレクトBB！」

「それ、釣れる物違う！」

“きゅうしょにあたった”僕の全力で釣り上げた物は……薄汚れたセレビィのぬいぐるみだった。

「誰だよ捨てたの！　ボックスいっぱいだったの？　自然を汚しやがって！　って言うか何でセレビィなんだよ、いらねえよ！　そこはせてミュウにしろよ！　許さんぞ、ゲームフリーク！」

「逆恨みにも程があるだろう！　……おっと」

今度はおっさんの竿が強く引いている。

「少年！　手伝ってくれ！」

「はい来た！」

「よし、行くぞお！」

そして、僕とおっさんはひとつになった。

「まぜっこモンスターアアアア！」

「多分それ、誰も覚えてない！」

正式名称は「超魔神英雄伝ワタル まぜっこモンスター」で、ひたすら色んなマンスターを混ぜて育てるゲームである。「まぜモン」と言う略称からも分かるように「ポケモン」の後釜を狙って登場したのだが、出落ちで終わってしまった懐かしのゲームだ。絶対誰も覚えてない。

それはそれとして、僕とおっさんがひとつになって釣り上げた物は、

「カアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

超巨大な化け物だった。

ムカデの様にいくつもの体節に分かれた黄色く細長い体で、各体節ごとに昆虫を思わせる一對の脚が生えている。頭には全長の半分の長大な触角が生え、二対の複眼と鋭い牙の生えた巨大な口を持ち、口の中には前にも見た赤い光球があった。

- - - - -  
# 0 0 3 : A v a t a r ・ T h e ・ L i t h i u m  
アバター リチウム

「ひつ……何だ、この化けも……」

「バオオオオオオオオオオオ！ ゲアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

恐怖で身が竦んだおっさんを、「神」が一飲みにする。

そしておっさんを食べ終えた「神」が僕の方に視線を移し、

「カアアアアアアアアア！ バオオオオオオオオオオオ！ ゲアアアアアアアアアアア！」

「神」が竜の如き咆哮を上げながら、その頭を振り下ろしてきた。  
「……………」

鋭い歯の並んだ巨大な口が僕に迫る。

そうか、僕、死ぬのか。

おっさんみたいに一飲みになれ、「神」の命の糧にされてしまうのか。

短かつたな、僕の人生……。

「待てえ えええええええええええええ！」

と、僕が走馬灯を見始めた時、下流の方から黒い物体がこちらに向かつて飛んで来た。

「おりゃあああああああああ！」

「グウガアアアアアアアアアアアアアアアア！」

黒い物体はその速度のまま突っ込み、吹っ飛ばされた「神」が水面に叩き付けられる。

「ア  
リ  
ユ  
ー  
！  
？」

その黒い物体はアリユ―だった。

さつき飛んで来た時は動きが速過ぎて黒い塊にしか見えなかったが、今日の前にいるのは紛れもなくアリユーである。

「大丈夫だったアルカ？」

アリユーは華麗に宙返りしながら僕の目の前に着地すると、心配そうな顔で聞いてきた。

「……う、うん。大丈夫だよ」

それに対して僕は間誤付きながら答える。

そう、僕は無傷である。体は。

「そ、それより何で「神」がこんな川にいるの!？」

僕は恐怖を紛らわす為に、そんな質問をした。

「私達『デルタ界』の住人は憑依した相手の体に乗っ取って自分の物にする……けど同時に憑依した相手からも「本能的な部分」の影響を受けてしまうアル」

「え？ どういう事？」

「簡単に言えば、相手の「習性」を受け継ぐアル。この世界で言えば憑依している昆虫の習性ネ。奴が憑依しているのは「ヘビトンボ」



アリユーと「神」の両者が改めて対峙した。

「……って、あれ！？ 理由話してもらえないの！？」

「……それは」

「それは？」

「次回をお楽しみに！」

「アイキヤツチすればいいと思うなよ！」

「サービス、サービス！」

「うるせー！」

そして、全ては次回に持ち越される。

## 安常処順（後書き）

まず謝リマス。ごめんなさい。前回のあとがきで「謎は全て解けた！」「みたいな内容になるとか言いツツ、結局次回に持ち越されまシタ。すいません。許してください。予想より分量多くなつたノデ…  
…次回はちゃんと解決します。……では次回をお楽しみ～！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1377ba/>

---

ゴキげんNANAME！

2012年1月10日23時46分発行